

「複合化」が進む学部・学科改編

鹿島 梓 / 鈴木規子 カレッジマネジメント編集部

1章 学科のライフサイクルとマーケット・トレンド

本調査では、「リクルート入試実態調査」の集計データを基に、2018年時点で国公立大学が設置していた5174学科について、学科名称や教育内容に照らし合わせ、リクルート独自の12の大分類、78の小分類(図表1)に分類した。この78分類に当てはまった3458学科を「単独分野」と定義。また、複数分野が融合して78分類に当てはまらなかった1716学科を「複

合分野」と定義した。以下、単独分野と複合分野に分けて、考察を行うこととする。本章では、まず1992年から2018年までの26年間に、学科のライフサイクルがどのように変化してきたかを単独分野について概観する。

単独分野から見る学科系統のライフサイクル

では、まず単独分野の学科系統の

ライフサイクルから見ていこう。

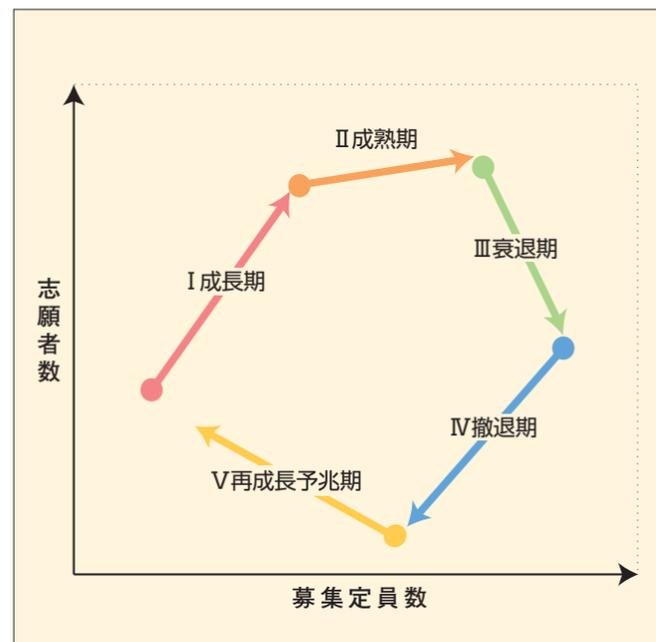
縦軸に志願者数、横軸に募集定員数を置き、図表上の矢印で、ライフサイクルのパターンがどのように変化してきたかを示したのが、学科系統のライフサイクル図である(P.6図表2-1参照)。さらにここでは、I成長期、II成熟期、III衰退期、IV撤退期、V再成長予兆期という、5つの段階があると仮説を立てた。

図表1 学科の78学問分類と2016-2018トレンド一覧 ※トレンド: ↗(成長期)、→(成熟期)、↘(衰退期)、↙(撤退期)、↖(再成長予兆期)

学科系統(大分類)	学科系統(小分類)	トレンド	学科系統(大分類)	学科系統(小分類)	トレンド	学科系統(大分類)	学科系統(小分類)	トレンド
1 文化・地理・歴史	1 地理学	↖	6 生物	27 住居学	→	11 スポーツ・健康・医療	53 語学(外国語)	↗
	2 歴史学	↗		28 生活科学	↖		54 語学(日本語)	↗
	3 考古学	↖		29 生物学	↘		55 スポーツ学	→
	4 文化人類学	↖		30 生命科学	↘		56 健康科学	↗
	5 日本文化学	↗		31 農学	↘		57 医学(専門課程)	→
	6 言語学	→		32 森林科学・水産学	→		58 歯学(専門課程)	↘
	7 教養学	↖		33 獣医・畜産学	↙		59 薬学	↘
2 芸術・文学・表現	8 音楽	↙	7 社会・マスコミ	34 社会学	↗	12 工学・建築・技術	60 看護学	↗
	9 美術	↗		35 観光学	↗		61 保健衛生学	↘
	10 デザイン	↖		36 情報学	↖		62 リハビリテーション学	↘
	11 舞台・演劇学	→		37 図書館情報学	↗		63 医療技術学	→
	12 日本文学	↗		38 コミュニケーション学	↙		64 機械工学	↙
	13 外国文学	↖		39 マスコミ学	↗		65 航空・船舶・自動車工学	↙
	14 児童文学	—		40 メディア学	↗		66 システム・制御工学	↖
3 数学・物理学・化学	16 数学	→	8 人間・心理・教育・福祉	41 哲学・宗教学	↗	67 情報工学	↗	
	17 物理学	↙		42 心理学	↗	68 通信工学	↖	
	18 化学	↙		43 人間科学	↙	69 電気工学	↗	
4 法律・政治・経済	19 法学	↖		44 教育学	→	70 電子工学	↖	
	20 政治・政策学	↗		45 保育・児童学	↘	71 画像・音響工学	↖	
	21 総合政策学	↗		46 福祉学	↖	72 建築学	↗	
	22 経済学	↗		9 地球・環境・エネルギー	47 地球・宇宙学	↗	73 土木工学	↗
	23 経営学	↖	48 環境科学		→	74 環境工学	↖	
	24 商学	↗	49 エネルギー・資源工学		↗	75 応用物理学	↖	
5 家政・生活	25 栄養・食物学	↘	10 国際・語学	50 原子力工学	↗	76 応用化学	↙	
	26 服飾・被服学	↘		51 国際関係学	↖	77 材料工学	↙	
				52 国際文化学	↖	78 経営工学	↙	

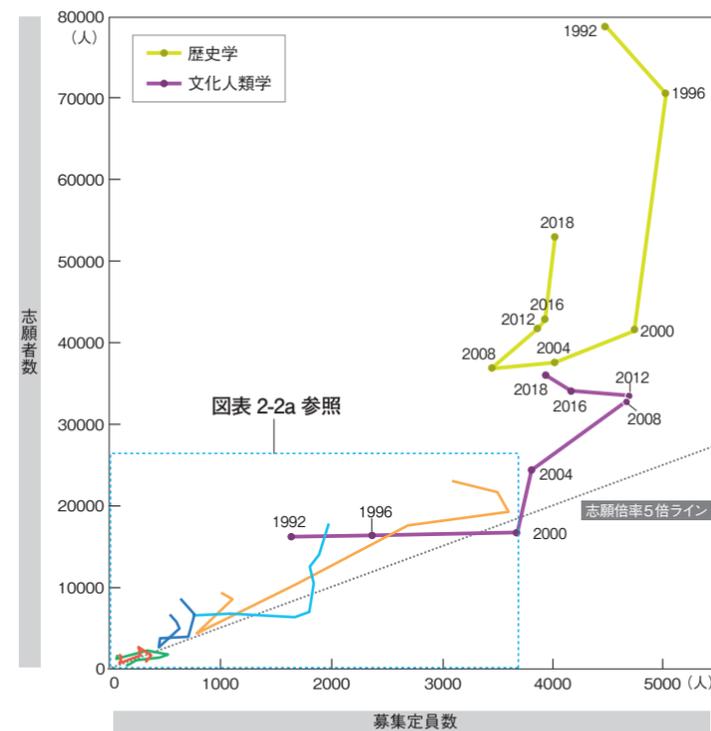
※リクルート独自分類

図表 2-1 学科系統のライフサイクル図



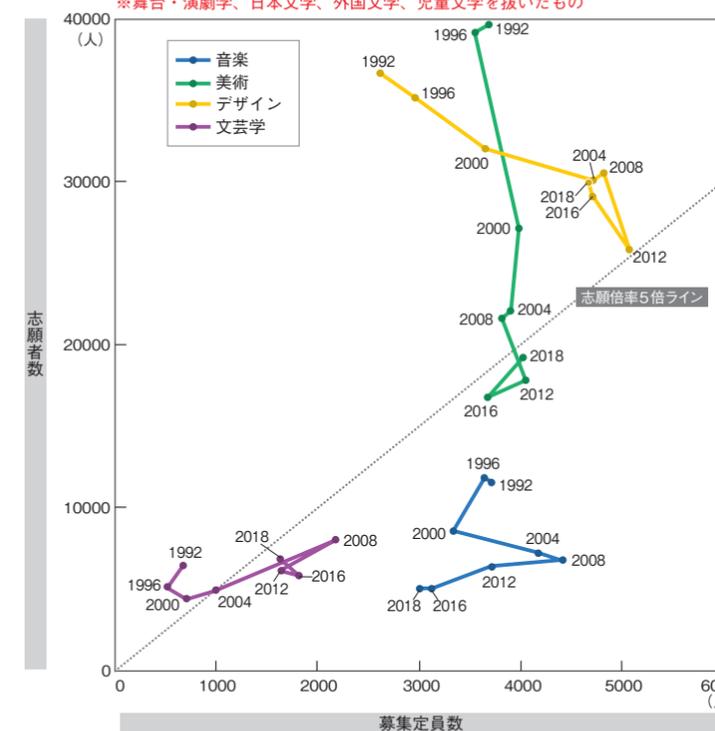
図表 2-2 文化・地理・歴史系統の動向

■志願者数×募集定員数 推移(1992、1996、2000、2004、2008、2012、2016、2018)
※歴史学、文化人類学を抜いたもの



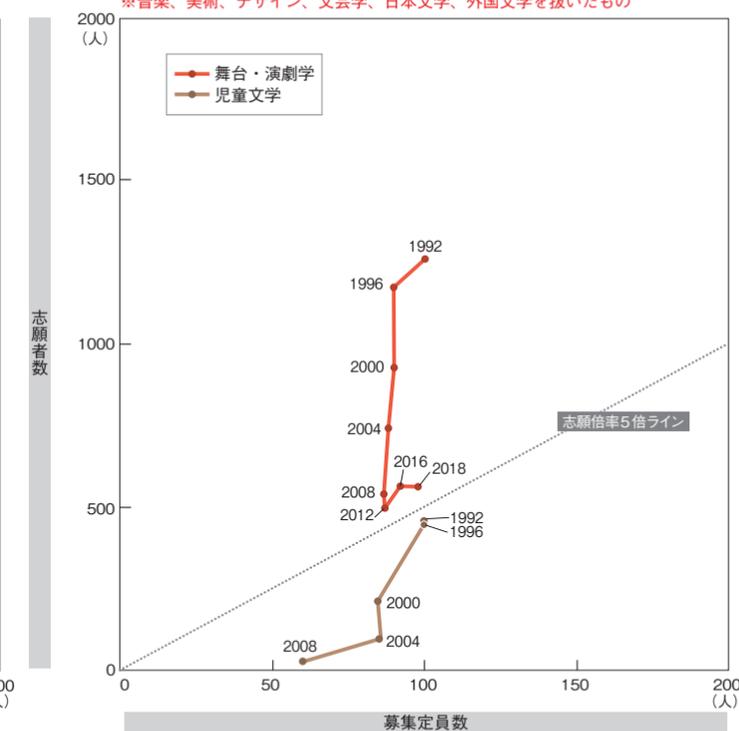
図表 2-3a 芸術・文学・表現系統の動向

■志願者数×募集定員数 推移(1992、1996、2000、2004、2008、2012、2016、2018)
※舞台・演劇学、日本文学、外国文学、児童文学を抜いたもの



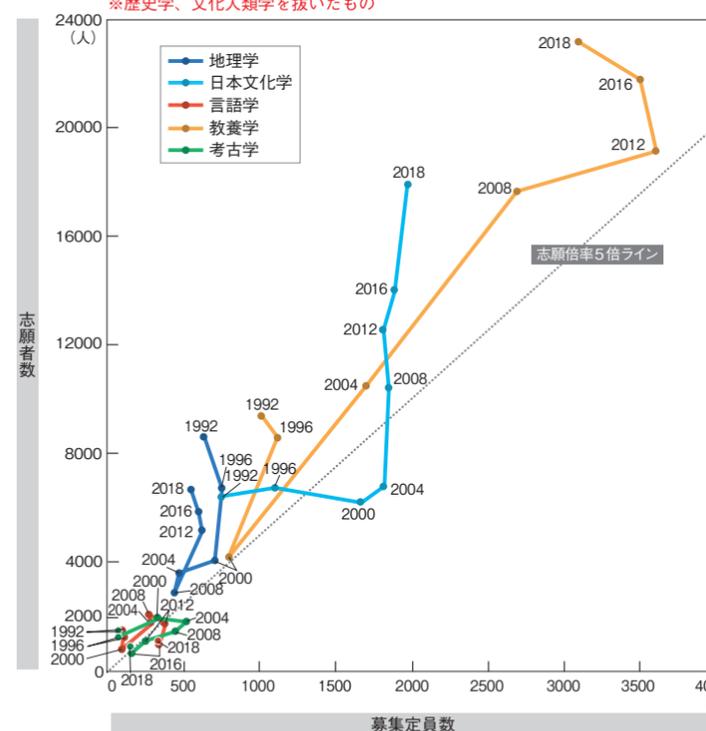
図表 2-3b 芸術・文学・表現系統の動向

■志願者数×募集定員数 推移(1992、1996、2000、2004、2008、2012、2016、2018)
※音楽、美術、デザイン、文芸学、日本文学、外国文学を抜いたもの



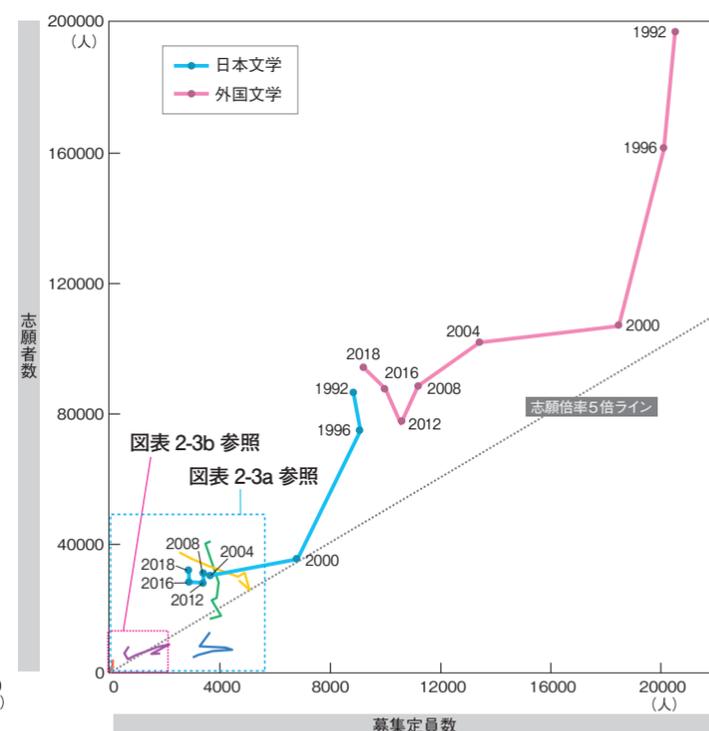
図表 2-2a 文化・地理・歴史系統の動向

■志願者数×募集定員数 推移(1992、1996、2000、2004、2008、2012、2016、2018)
※歴史学、文化人類学を抜いたもの



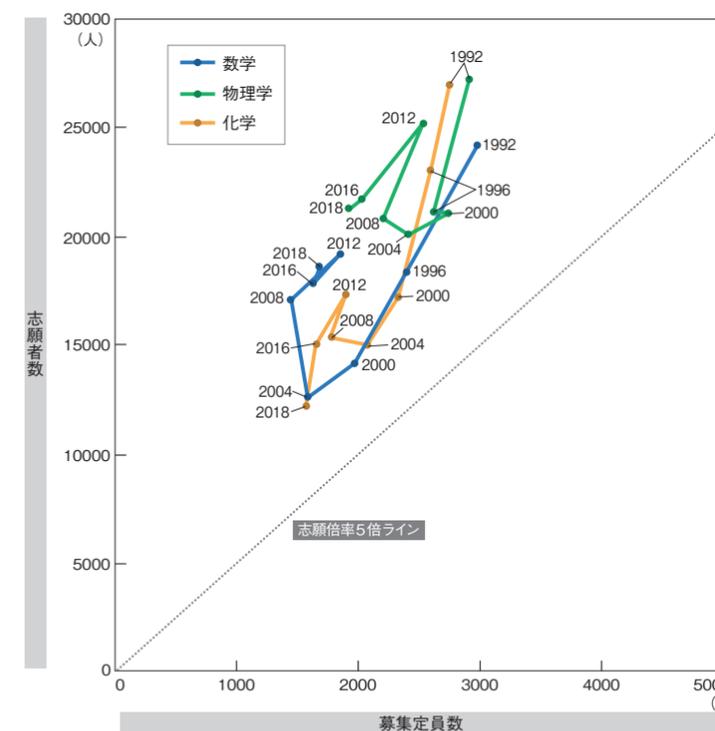
図表 2-3 芸術・文学・表現系統の動向

■志願者数×募集定員数 推移(1992、1996、2000、2004、2008、2012、2016、2018)



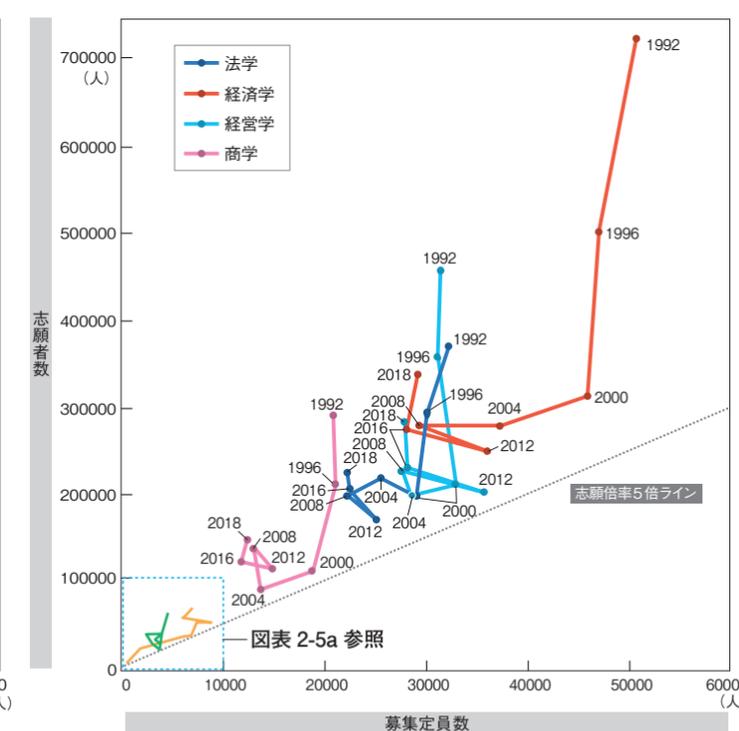
図表 2-4 数学・物理学・化学系統の動向

■志願者数×募集定員数 推移(1992、1996、2000、2004、2008、2012、2016、2018)



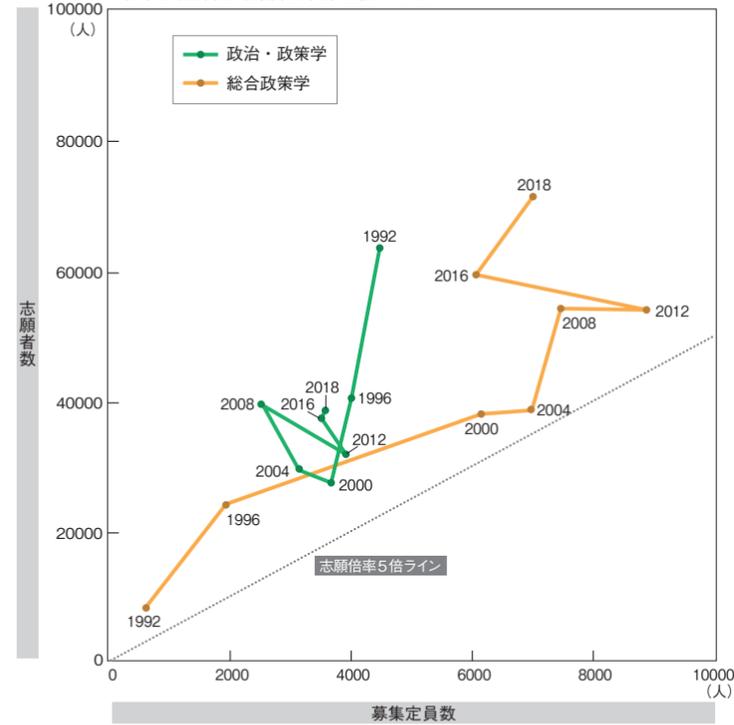
図表 2-5 法律・政治・経済系統の動向

■志願者数×募集定員数 推移(1992、1996、2000、2004、2008、2012、2016、2018)



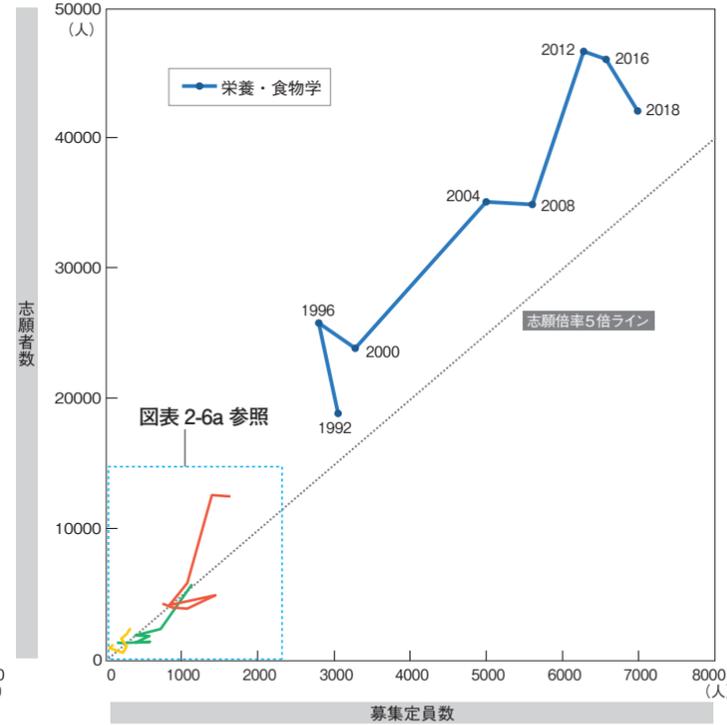
図表 2-5a 法律・政治・経済系統の動向

■志願者数×募集定員数 推移(1992、1996、2000、2004、2008、2012、2016、2018)
※法学、経済学、経営学、商学を抜いたもの



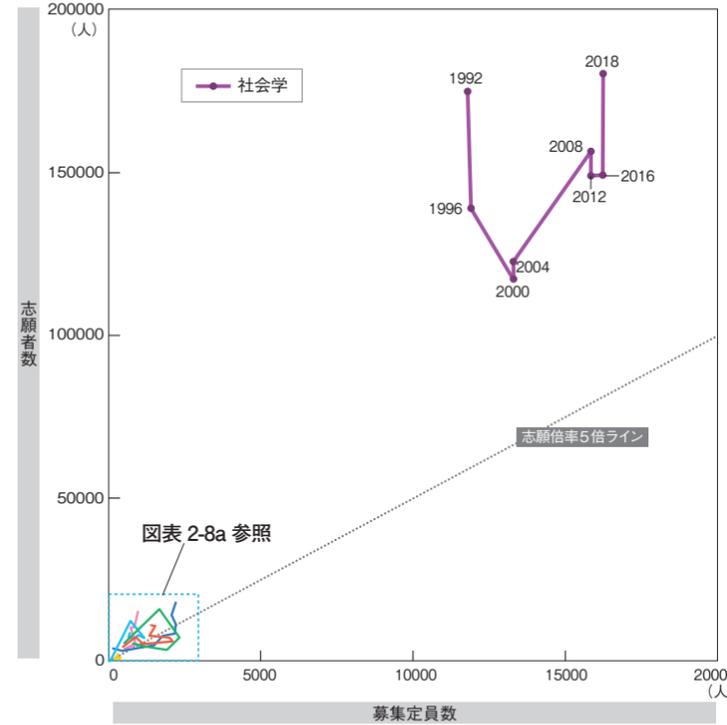
図表 2-6 家政・生活系統の動向

■志願者数×募集定員数 推移(1992、1996、2000、2004、2008、2012、2016、2018)



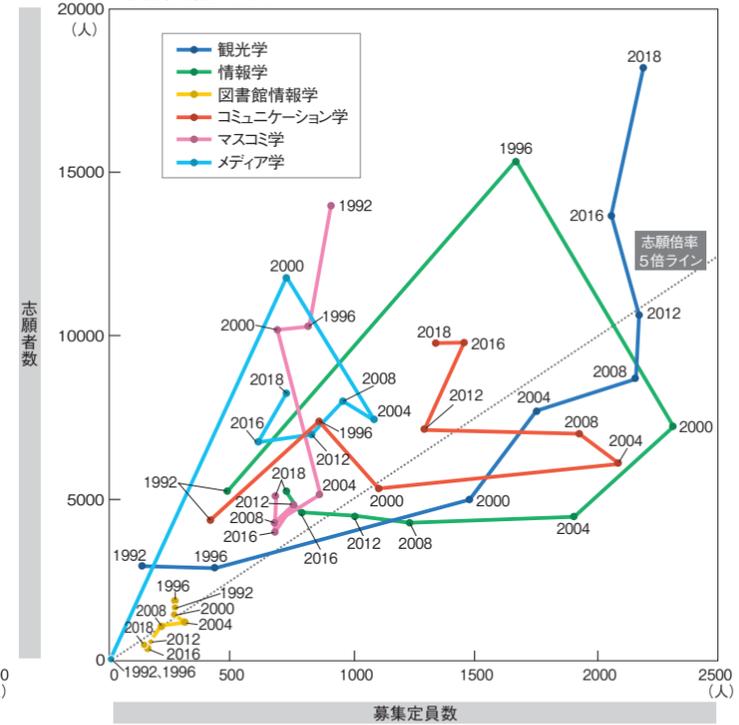
図表 2-8 社会・マスコミ系統の動向

■志願者数×募集定員数 推移(1992、1996、2000、2004、2008、2012、2016、2018)



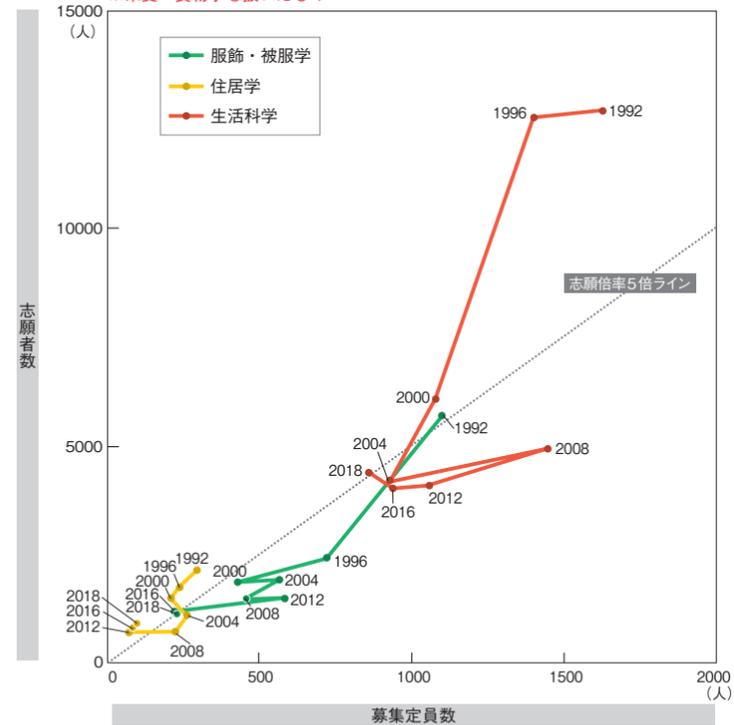
図表 2-8a 社会・マスコミ系統の動向

■志願者数×募集定員数 推移(1992、1996、2000、2004、2008、2012、2016、2018、2018)
※社会学を抜いたもの



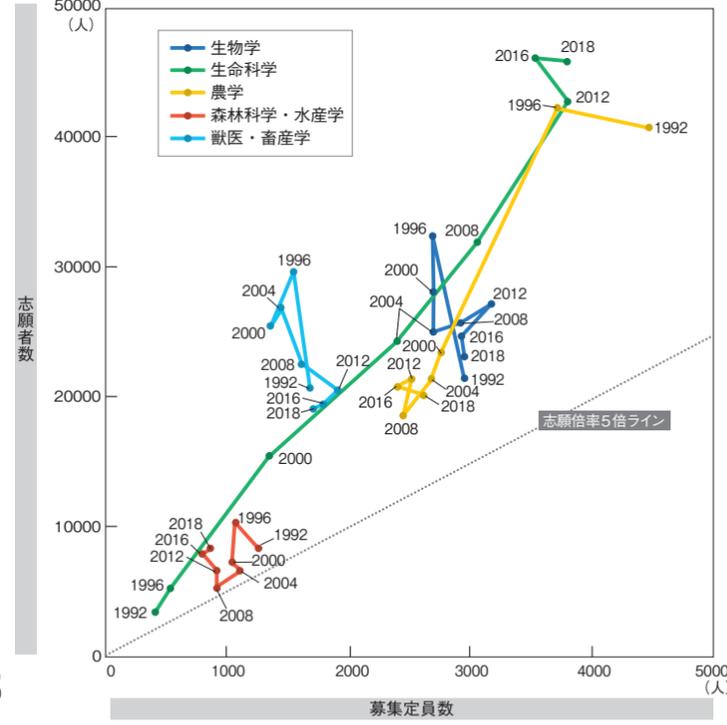
図表 2-6a 家政・生活系統の動向

■志願者数×募集定員数 推移(1992、1996、2000、2004、2008、2012、2016、2018)
※栄養・食物学を抜いたもの



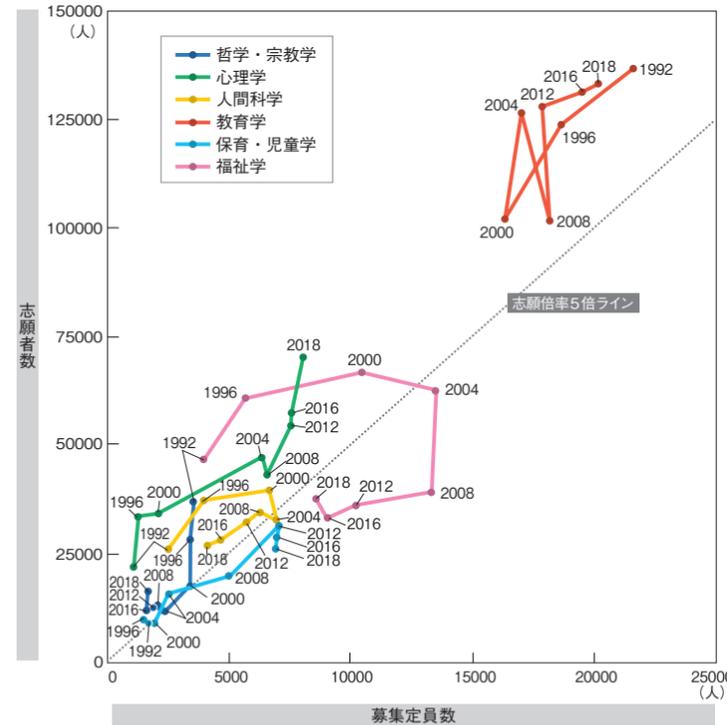
図表 2-7 生物系統の動向

■志願者数×募集定員数 推移(1992、1996、2000、2004、2008、2012、2016、2018)



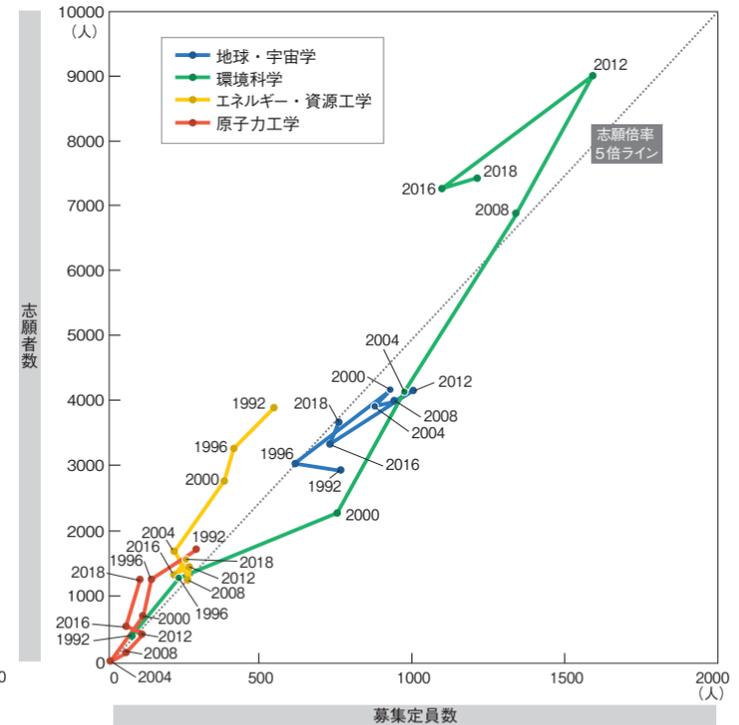
図表 2-9 人間・心理・教育・福祉系統の動向

■志願者数×募集定員数 推移(1992、1996、2000、2004、2008、2012、2016、2018)



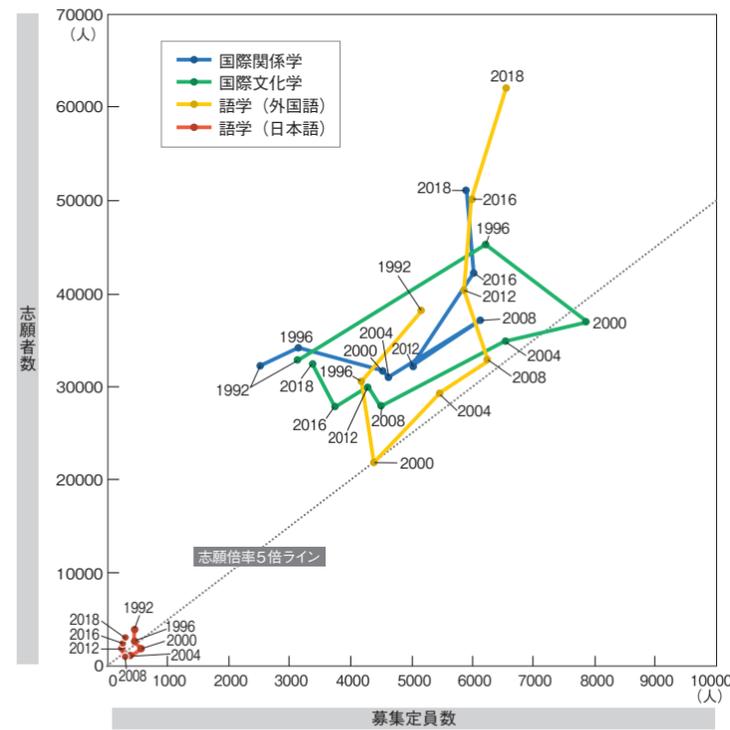
図表 2-10 地球・環境・エネルギー系統の動向

■志願者数×募集定員数 推移(1992、1996、2000、2004、2008、2012、2016、2018)



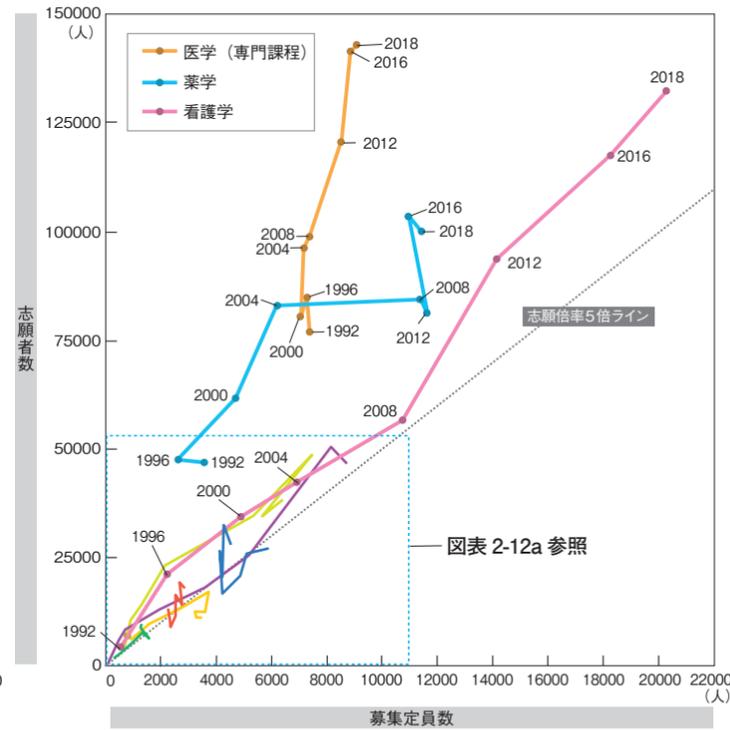
図表 2-11 国際・語学系統の動向

■志願者数×募集定員数 推移(1992、1996、2000、2004、2008、2012、2016、2018)



図表 2-12 スポーツ・健康・医療系統の動向

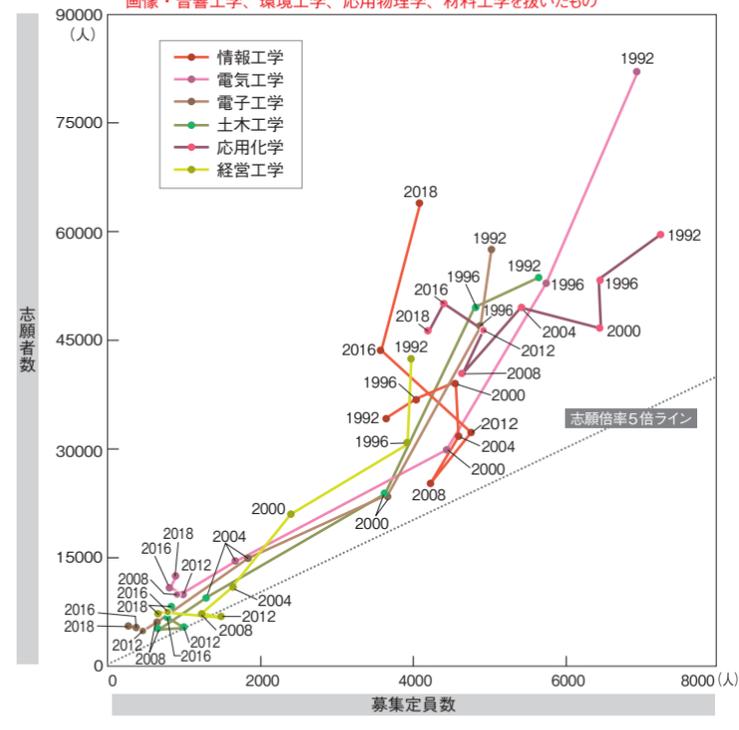
■志願者数×募集定員数 推移(1992、1996、2000、2004、2008、2012、2016、2018)



図表 2-13a 工学・建築・技術系統の動向

■志願者数×募集定員数 推移(1992、1996、2000、2004、2008、2012、2016、2018)

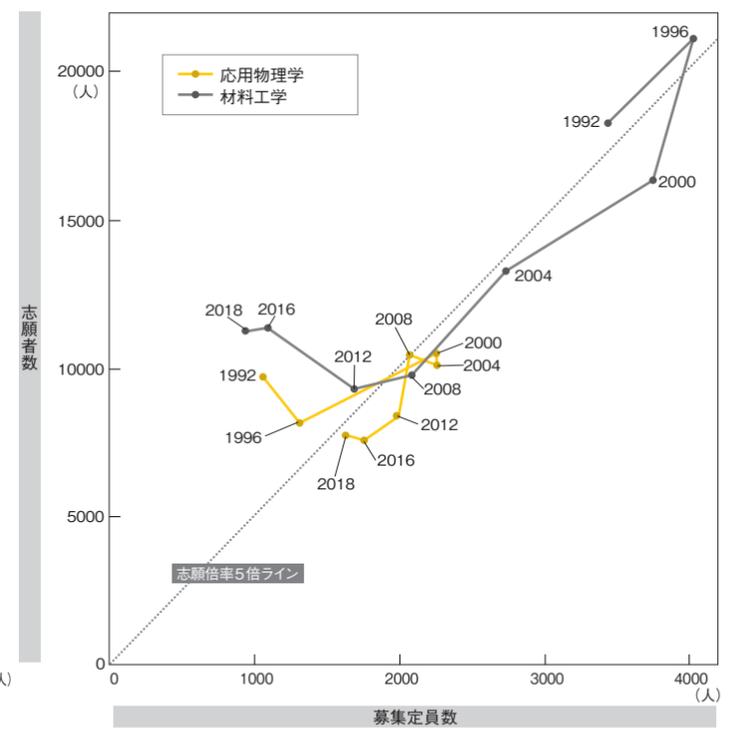
※機械工学、建築学、航空・船舶・自動車工学、システム・制御工学、通信工学、画像・音響工学、環境工学、応用物理学、材料工学を抜いたもの



図表 2-13b 工学・建築・技術系統の動向

■志願者数×募集定員数 推移(1992、1996、2000、2004、2008、2012、2016、2018)

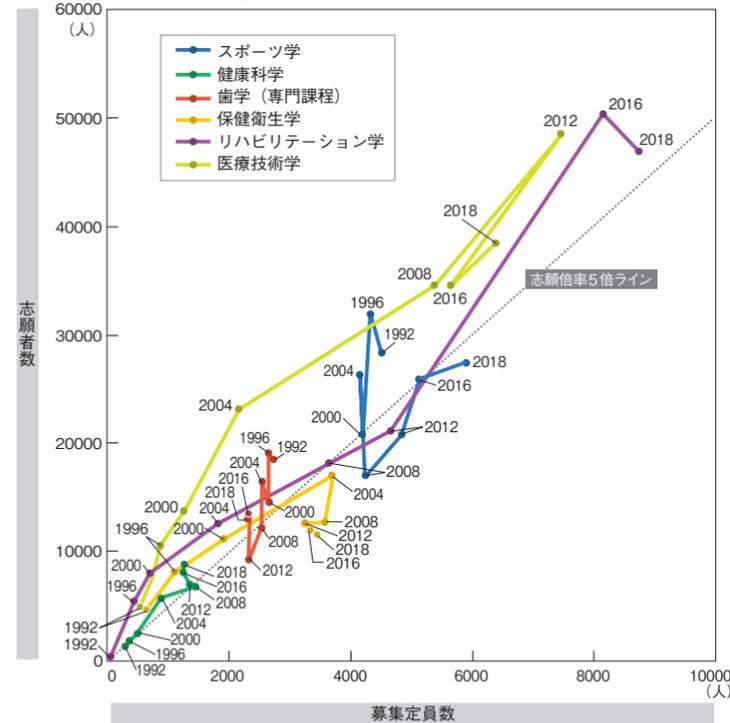
※応用物理学、材料工学



図表 2-12a スポーツ・健康・医療系統の動向

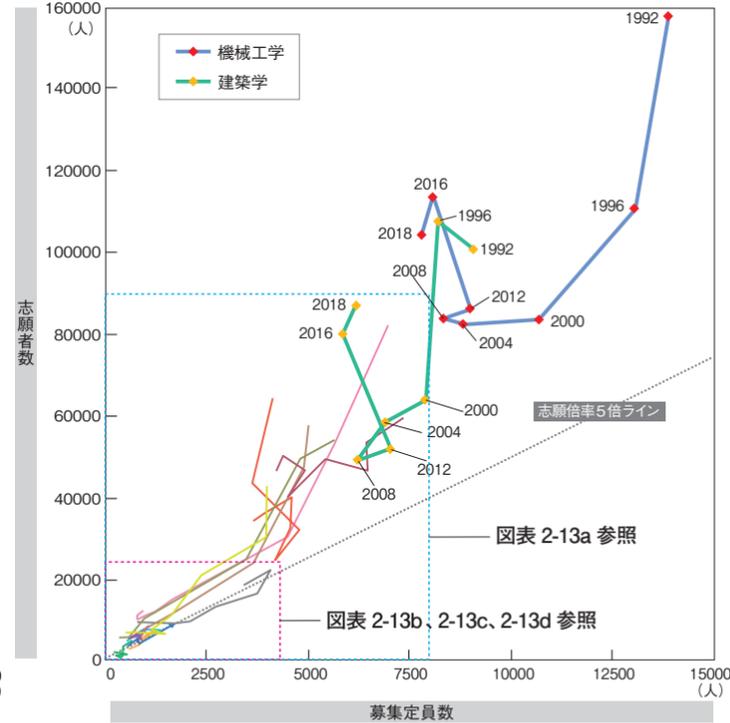
■志願者数×募集定員数 推移(1992、1996、2000、2004、2008、2012、2016、2018)

※医学(専門課程)、薬学、看護学を抜いたもの



図表 2-13 工学・建築・技術系統の動向

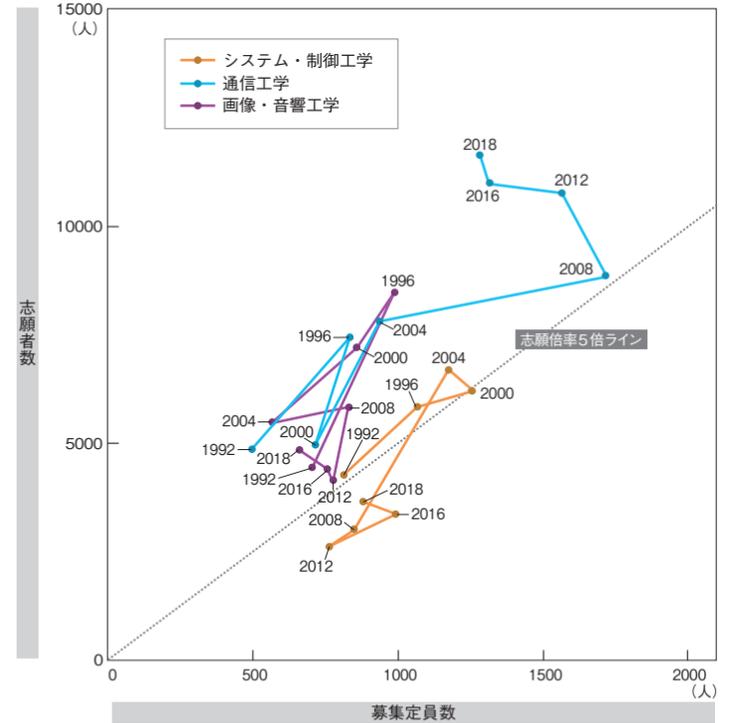
■志願者数×募集定員数 推移(1992、1996、2000、2004、2008、2012、2016、2018)



図表 2-13c 工学・建築・技術系統の動向

■志願者数×募集定員数 推移(1992、1996、2000、2004、2008、2012、2016、2018)

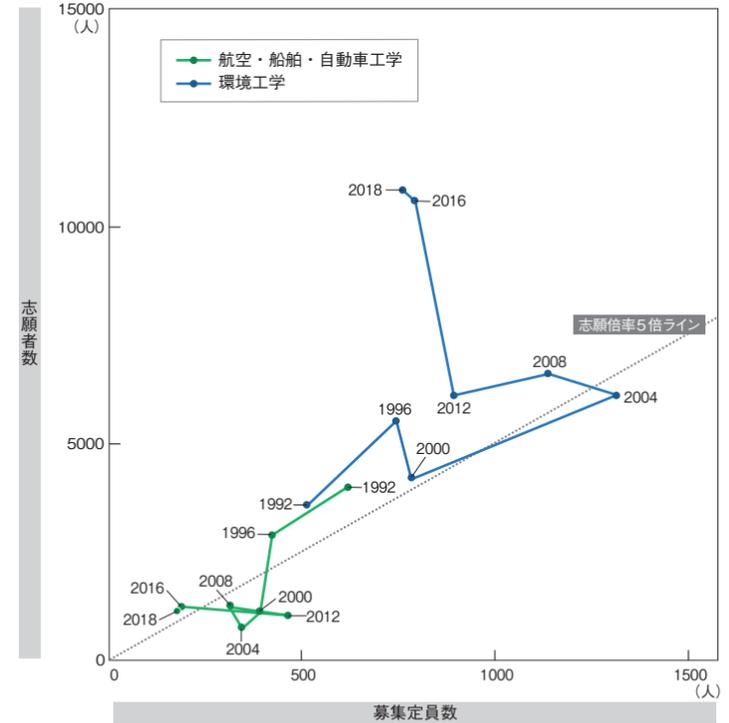
※システム・制御工学、通信工学、画像・音響工学



図表 2-13d 工学・建築・技術系統の動向

■志願者数×募集定員数 推移(1992、1996、2000、2004、2008、2012、2016、2018)

※航空・船舶・自動車工学、環境工学



I 成長期

ある大学が、最初に新分野の学科を設置した時の、募集定員数と志願者数を起点とする。最初の成功例に追従して、他大学が同分野の学科を設置することで募集定員が増加し、志願者数も拡大していく、マーケットの創造段階。

II 成熟期

ある分野で募集ニーズが拡大しているため、後追いで新增設が増えた結果、募集定員の増加率が志願者の増加率を上回り、成長が鈍化する段階。

III 衰退期

学科の流行が過ぎ去り、別の分野に志願者が流れ始めているのに、志願倍率の高さから新增設が増え続けることで、かえって志願倍率が下がり、需給バランスが崩れた段階。

IV 撤退期

志願者の減少により、他分野への改組が始まり、募集定員数が減少し、マーケットから淘汰される段階。

V 再成長予兆期

撤退期が続き、募集定員数が減少する中、様々な要因で志願者数が増加する段階。志願者増を見込んだ大学が新增設で定員を増やし、志願者数も増加すれば、再び成長期に入る。

それでは実際に、学科系統ごとに、1992年から概ね4年刻みで示したライフサイクル図で、各分野の特徴をご覧頂きたい(図表2-2から2-13)。なお、各系統の名称とどのサイクルにあるかについては図表1に示した。

単独分野のライフサイクル

文化・地理・歴史系統(図表2-2、2-2a)

分野の中で最大の志願者数を持つのは歴史学。1992年には約8万人だった志願者は2004年には約半数まで減少し、その後再び成長期に入り、2018年には5万3000人まで回復した。募集定員も近年は4000人前後で落ち着いている。

1992年時点では志願者数1万6305人だった文化人類学は市場を拡大し、2018年には3万6177人に達した。2016年から再成長予兆期に入っている。教養学は2012年まで右肩上がりの成長期だったが近年は落ち着き、一旦の縮小を経て再成長予兆期に転じた。日本文化学は、2004年以降募集定員は増えていないが、志願者数は6867人から1万7888人と約2.6倍にもなった。

芸術・文学・表現系統(図表2-3、2-3a、2-3b)

分野の中で最大の志願者数を持つのは外国文学、次いで日本文学であるが、いずれも2012～2016年頃減少傾向だった志願者数が底を打ち、再成長予兆期に入っている。

昨今STEAM教育^{*2}等で注目を集める芸術分野の中でも志願倍率5倍のラインを超えるのはデザインのみ。他分野と複合しやすいであろうデザインは単独で見ても再成長予兆期に入っている。美術は定員に大きな変化がなく固定化された市場で志願者数が減少していたが、2016年を機に回復傾向となり、成長期に入った。児童文学は2012年段階で募集停止となっている。

数学・物理学・化学系統(図表2-4)

数学は1992～2004年まで長く撤退

期であったが、2004年を境に盛り返し、2012年、2016年でそれぞれ分岐をはさみ現在成熟期である。物理学と化学は共に2004年までは概ね減少していたが2008年に成長期に転じ、2012年から再び撤退期に入っている。

法律・政治・経済系統(図表2-5、2-5a)

分析開始の1992年を頂点として市場縮小し、一旦撤退期から再成長予兆期に入り、現在は再び成長期に入っている系統が多い分野。法学は2000年・2012年と転機はあるものの分析開始以降概ね撤退期の減少トレンド。2016→2018年は、定員はほぼ変わらず志願者が約2万人増加する等盛り返している。経済学は1992～2000年の撤退期で志願者数を約4万人減らし、市場規模は半減した。以降は2008年にやや盛り返すも概ね撤退期の軌跡をたどり、2016年に増加トレンドに転じた。似たトレンドを辿っているのが経営学と商学である。総合政策学は分野トレンドとは逆に、1992年から長く成長トレンドにあった。2012年から定員は減少したものの2016年以降再び成長期に入っている。

家政・生活系統(図表2-6、2-6a)

1992年以降多少の凹凸はあるものの概ね順調な成長期が続いていた栄養・食物学だが、2016→2018年で衰退期に転じた。その他の3系統はいずれも1992年時点の定員・志願者数を頂点として程度の差はあるものの市場縮小の傾向にある。

生物系統(図表2-7)

生命科学は、1992～2012年まで

の20年間成長の一途を辿ったが、2018年段階では衰退期にある。生物学は撤退期から衰退期となり、森林科学・水産学は2008年からの再成長予兆期を脱し、現在は成熟期である。獣医・畜産学は2004年以降衰退期を経て撤退期に入っている。

第六次産業化等への期待が大きい農学は撤退期から2008年に再び成長期に入り、再び撤退期を経て衰退期という、成長の幅が狭い状態でトレンドを循環している。

社会・マスコミ系統(図表2-8、2-8a)

系統最大の分野である社会学は再び成長期に入っている。近年で最も志願者が落ち込んだ2000年から6.3万人ほどの志願者が戻り、18万人という分析開始以来の志願者数に達している。このほか好調なのは、観光学、情報学、コミュニケーション学、メディア学。観光学は近年志願倍率5倍を超え、成長期と成熟期を行き来している。訪日観光客や東京オリンピック等、近年観光に関するテーマは幅広く、高校生からも注目されている様子が垣間見える。情報学は2008年から緩やかな再成長予兆期が続く。コミュニケーション学は2012～2016年に志願者数が7086人から9772人に増加し、2018年にかけてもその水準を維持している。メディア学は2012年以降撤退期に入っていたが2016年に成長期に転じた。図書館情報学は2012年から定員に変化がない中、志願者数もほぼ同水準に留まっている。

図表3 単独分野の志願者増減ランキング(2008年～2012年/2015年～2018年)

<増加>					
● 2008年～2012年			● 2015年～2018年		
順位	学科系統(小分類)名称	08-12志願者増減(人)	順位	学科系統(小分類)名称	15-18志願者増減(人)
1	看護学	37532	1	経済学	90298
2	教育学	26118	2	経営学	67173
3	医学(専門課程)	22079	3	法学	50937
4	医療技術学	13827	4	商学	49225
5	栄養・食物学	11709	5	社会学	37872
6	保育・児童学	11367	6	看護学	22281
7	生命科学	10886	7	情報工学	21375
8	心理学	10766	8	心理学	21216
9	情報工学	7021	9	国際関係学	18626
10	語学(外国語)	6814	10	総合政策学	15950
11	応用化学	6164	11	建築学	13507
12	歴史学	4739	12	語学(外国語)	11643
13	物理学	4439	13	歴史学	11173
14	スポーツ学	3694	14	政治・政策学	8119
15	リハビリテーション学	2897	15	外国文学	7300
16	建築学	2842	16	スポーツ学	5692
17	農学	2646	17	文化人類学	5626
18	機械工学	2539	18	観光学	5523
19	地理学	2295	19	日本文学	5420
20	日本文学	2182	20	哲学・宗教学	5204

<減少>					
● 2008年～2012年			● 2015年～2018年		
順位	学科系統(小分類)名称	08-12志願者増減(人)	順位	学科系統(小分類)名称	15-18志願者増減(人)
1	経済学	-30261	1	薬学	-14246
2	法学	-26132	2	機械工学	-11093
3	経営学	-24782	3	栄養・食物学	-6595
4	商学	-24163	4	保育・児童学	-3749
5	外国文学	-10137	5	化学	-3154
6	政治・政策学	-7717	6	リハビリテーション学	-2876
7	社会学	-7518	7	農学	-2717
8	国際関係学	-4650	8	経営工学	-2496
9	デザイン	-4643	9	生物学	-2434
10	美術	-3776	10	物理学	-2281
11	歯学(専門課程)	-3116	11	応用物理学	-1400
12	福祉学	-3038	12	応用化学	-1180
13	薬学	-2916	13	環境科学	-1146
14	人間科学	-2411	14	歯学(専門課程)	-995
15	応用物理学	-2087	15	生活科学	-731
16	獣医・畜産学	-2079	16	獣医・畜産学	-729
17	文芸学	-1802	17	保健衛生学	-304
18	画像・音響工学	-1651	18	航空・船舶・自動車工学	-300
19	日本文学	-1374	19	地球・宇宙学	-147
20	メディア学	-1044	20	服飾・被服学	-54

人間・心理・教育・福祉系統(図表2-9)

系統内で最大のマーケットである教育学は2012年以降成熟期に入り、緩やかに市場を拡大している。心理学も1992年から概ね成長期と言える拡大を見せており、近年は定員の増加に対してやや大きな志願者増加が続いている。一方で2012年まで長きにわたる成長期にあった保育・児童学は2012年以降、人間科学は2008年以降、それぞれ撤退期に入っている。長らく市場縮小が続く福祉学は2016年より志願者数がやや持ち直し、再成長予兆期に入っている。

地球・環境・エネルギー系統(図表2-10)

マーケット規模はあまり大きくないが、近年動きが大きいのは環境科学。1996年以降長く成長の一途であったが2012年を機に撤退期に入り2016年以降成熟期に転じた。地球・宇宙学、エネルギー・資源工学、原子力工学はいずれも2016年から成長期に入り、緩やかに市場を拡大しつつある。

国際・語学系統(図表2-11)

2012年以降マーケット伸長している国際関係学は再成長予兆期だが、定員は大きく増えずに志願者が増加している状態。語学(外国語)も同様の状態である。国際文化学はきれいなライフサイクルを描いており、2016年から再成長予兆期に入っている。語学(日本語)は分野全体から見ると小さなマーケットではあるが、2012年から成長期に入って

いる。

スポーツ・健康・医療系統(図表2-12、2-12a)

好調なのは、医学(専門課程)、看護学である。医学(専門課程)は成熟期に入ったが、看護学は20年以上成長期にある。薬学は2004年まで成長期、衰退期を経て再成長予兆期にあったが、2016年から再び衰退期に入った。健康促進や予防医療の文脈で学際化が増えているスポーツ学は、単独で見ても2008年以降成長期にあったが、現在は成熟期だ。健康科学は長らく成長期にあったが2008年以降はやや鈍化。歯学(専門課程)は2012年以降志願者が増加し、2016年以降やや減少。

比較的好調な系統が多い中、相対的に不調と言えるのは、2004年以降衰退・撤退期を行き来している保健衛生学、同じく撤退期にあるリハビリテーション学である。

工学・建築・技術系統(図表2-13、2-13a、2-13b、2-13c、2-13d)

1992年時点が最大の志願者数で減少トレンドという系統が多い中、好調なのは情報工学である。2016年以降成長期に入り、志願者も2016年4.3万人→2018年6.4万人と2万人増加している。建築学も2016年以降成長期に入っている。

単独分野の志願者数の動向(2008-2012、2015-2018)

このようにライフサイクル図を見ると、系統・分野のトレンドは社会情

勢を反映したものであることが分かる。では近年のトレンド全体像はどうなっているのか。まずは単独分野について見てみたい。

直近の4年間(2015-2018年)で志願者数の増減が大きい学科系統分野を図表3に示した。比較対象として2008-2012年の内容を左側に置いた。左列は2008年にリーマンショック、2011年に東日本大震災もあり、景況が悪化し、大卒求人倍率が低迷した時期である。そのため、高校生の進路選択が保守的になり、資格取得が仕事に直結する学問分野が志願者を集めた。右列は、2012年安倍政権発足以降のアベノミクスによる景気回復により就職状況が改善した社会科学系、Society5.0で注目を集める電気電子や情報、ロボティクスといった分野、東京五輪需要に沸く建築土木関係等に関する学部・学科に人気が集まり、トレンドの入れ替わりが起きている。

減少においても同様に変化が見られる。2015-2018の志願者減少上位は薬学、栄養・食物学、保育・児童学、リハビリテーション学といった資格取得を軸にした分野のほか、機械工学、化学、農学といった分野であるが、いずれも他分野と融合し、新たに複合分野として発展を見せているものが多い。現実的に学際化が難しい国家資格系の学問分野を除き、単独分野だけでは志願者等の観点から厳しくなっている分野をどのように組み合わせるかとという点も注目される。

2章 複合分野のトレンド分析

本章では複合分野について考察を深めたい。

単独分野と複合分野のシェア推移(1992-2018)

まず単独分野と複合分野の比率であるが、設置数の比率を図表4に示した。募集定員比率では単独分野:複合分野は概ね7:3、志願者比率では7.5:2.5となっており、単独分野の比率が高いが、過去からの推移で見ると複合分野が増加、単独分野が減少傾向にある。

マーケットシェアを徐々に高める複合分野だが、その実態はなかなか見えにくい。文部科学省の学校基本調査上でも既存の系統分類に合わないと言われたものは大分類の「その他」または系統別の中分類「その他」に多

く分類されているが、その内容は多岐に渡る。大分類「その他」だけで1つの大分類として成り立つ分量であり、かつ、各系統の中分類としても「その他」が存在するのだ。もちろんその全てが小誌で扱う「複合」とは限らないが、複合的な分野は既存の系統に当てはまりづらく、把握が難しいのは確かである。

複合分野の志願者数の動向(2008-2012、2015-2018)

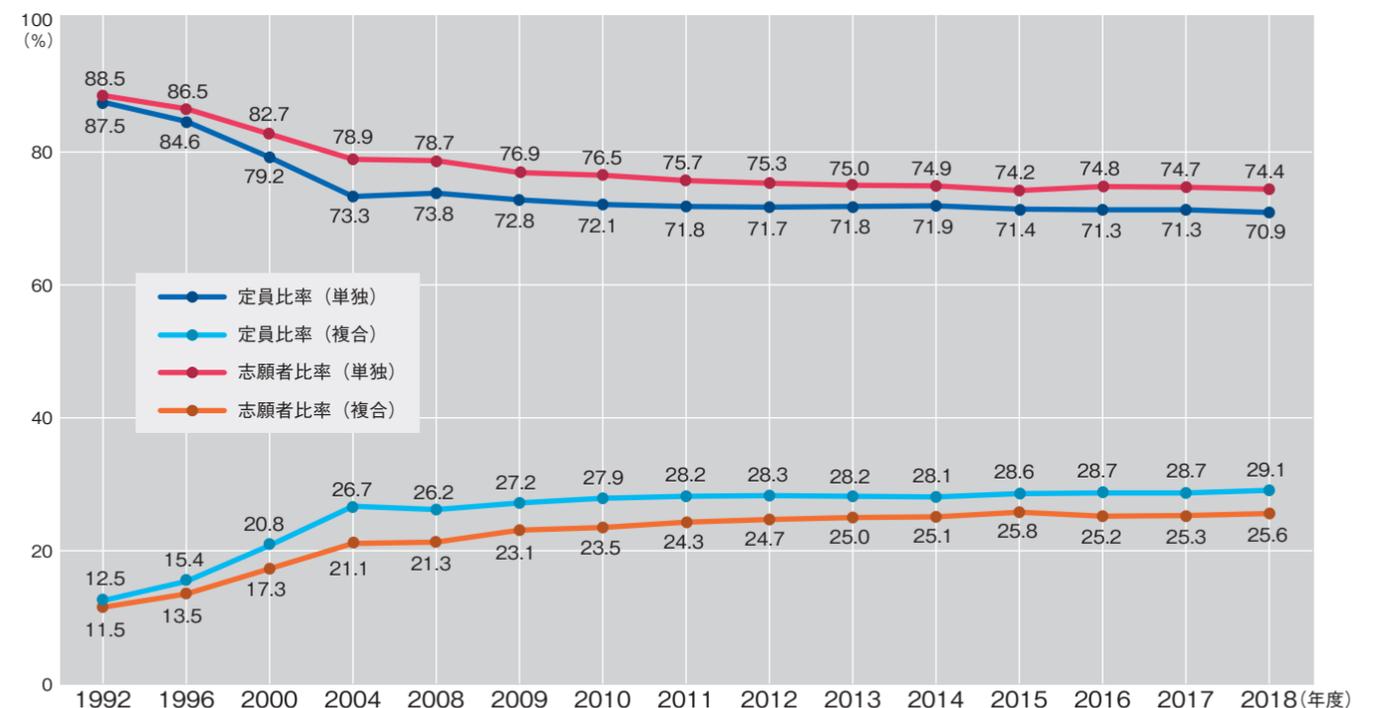
まず、1章で単独分野の志願者数の動向を見たように、複合分野についてもトレンドを見てみたい。図表5は、2008-2012年と2015-2018年それぞれの間志願者数が増加した複合分野の上位20位を表したものだ。もともとその学科が持っていた分野

がA分野、新たに追加された分野がB~F分野である。表中の色分けは、オレンジが同じ期間における単独分野の志願者数増加上位20位、ブルーが同じく志願者数減少上位20位を示している。

2008-2012年は1位スポーツ学×健康科学(2008→2012年で1万1156人増)、2位社会学×コミュニケーション学×マスコミ学×メディア学(1万621人増)、3位教育学×保育・児童学(7479人増)と、関連周辺領域での複合が上位に並んだ。1位は設置数29件のうち新增設19件、3位は41件中22件が新增設と、いずれも新設学科が牽引したマーケットであった。

2015-2018年は、1位日本文学×外国文学(2015→2018年で9018人増)、2位システム・制御工学×情報工学×

図表4 単独分野と複合分野の設置数比率



図表5 複合分野の志願者数増加ランキング(もともとその学科が持っていた分野がA分野、新たに追加された分野がB～F分野)

順位	2008年～2012年志願者増加						増加(人)	2012年設置数	2008-2012 新增設置数
	A分野	B分野	C分野	D分野	E分野	F分野			
1	スポーツ学	健康科学					11156	29	19
2	社会学	コミュニケーション学	マスコミ学	メディア学			10621	1	1
3	教育学	保育・児童学					7479	41	22
4	建築学	環境工学					6484	12	1
5	電気工学	電子工学	情報工学				5799	10	1
6	電気工学	電子工学					5011	46	8
7	社会学	国際関係学					4548	7	3
8	数学	物理学					4484	18	0
9	栄養・食物学	健康科学					3753	34	12
10	経済学	経営学					3468	18	5
11	社会学	情報学					3461	16	1
12	日本文学	日本文学					3386	4	2
13	教育学	スポーツ学					3384	6	4
14	人間科学	健康科学					3285	5	1
15	化学	生命科学					3108	8	1
16	健康科学	栄養・食物学					3004	2	2
17	物理学	生命科学	応用化学	機械工学	電気工学	環境科学	2711	1	1
18	社会学	経営学					2638	1	1
19	情報工学	情報学					2586	20	4
20	情報学	情報工学					2570	11	4

順位	2015年～2018年志願者増加							増加(人)	2018年設置数	2015-2018 新增設置数
	A分野	B分野	C分野	D分野	E分野	F分野	G分野			
1	日本文学	外国文学						9018	11	1
2	システム・制御工学	情報工学	通信工学					6679	5	4
3	情報学	情報工学						6671	36	5
4	経営学	情報学						5987	20	3
5	電気工学	電子工学						5927	40	3
6	社会学	コミュニケーション学	マスコミ学	メディア学				5798	4	0
7	システム・制御工学	情報工学	画像・音響工学					5208	1	1
8	デザイン	経営学	コミュニケーション学	システム・制御工学	情報工学	通信工学	画像・音響工学	5047	1	1
9	経済学	経営学						4943	22	3
10	総合政策学	社会学						3790	1	0
11	機械工学	電子工学						3619	3	1
12	社会学	心理学						3443	7	1
13	数学	物理学	化学	生物学				3359	10	3
14	日本文学	経済学	経営学	商学	栄養・食物学	社会学		3327	1	1
15	経済学	観光学	情報学					3220	6	3
16	社会学	メディア学						2981	4	0
17	社会学	情報学						2977	12	2
18	社会学	コミュニケーション学	スポーツ学	健康科学				2836	1	1
19	経営学	スポーツ学						2616	12	3
20	情報工学	電子工学						2337	19	2

通信工学(6679人増)、3位情報学×情報工学(6671人増)、4位経営学×情報学(5987人増)、5位電気工学×電子工学(5927人増)と続く。いずれも設置数に占める新增設の比率が低いという特徴がある。つまり、改めて設置したのではなく既存領域として存在していたものが、社会ニーズの変化等に呼応して注目されているということだ。上位5位中3つの複合で情報系が登場しているのもその証左となろう。

社会ニーズの変化で大きいのは第4次産業革命である。AIやデータサイエンス、ロボティクスといった領域の人材育成ニーズに対して、少し前までは、理工系の学部情報系の学科を持つ大学は多かったが、AIや

図表6 2018年複合分野設置数ランキング

順位	A分野	B分野	設置数	新增設	志願者数	志願倍率
1	教育学	保育・児童学	52	4	18087	3.9
2	栄養・食物学	健康科学	41	-	14895	5.0
3	電気工学	電子工学	40	1	42252	11.6
4	情報学	情報工学	36	1	40719	11.5
	スポーツ学	健康科学	36	2	25644	6.5
6	機械工学	システム・制御工学	32	3	18282	7.3
7	システム・制御工学	情報工学	23	1	12660	10.5
	日本文学	語学(日本語)	23	-	15687	9.5
9	経済学	経営学	22	2	18738	5.8
10	情報学	メディア学	21	-	9528	5.3

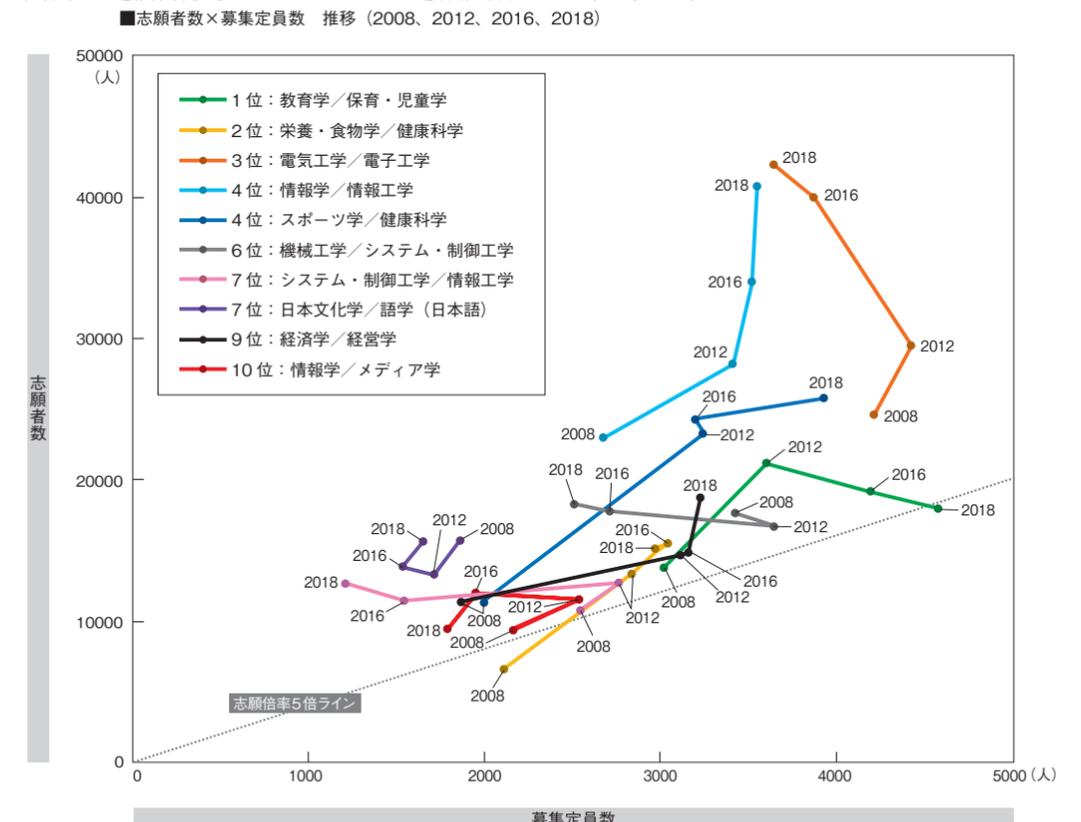
データサイエンスに特化した大学は決して多くなかった。近年はそうした動きに呼応する新增設や、既存分野でも対応する動きが見られる。

また、小学校でのプログラミング教育義務化、STEM教育^{*1}や国際教育の推進等、初等中等教育の現場

も様変わりしつつある。そうした教育との接続の意味でも、大学においてこれまでになかった領域の開発や既存分野の組み合わせが志向されるのは当然とも言える。

以上が志願者数から見た複合分野のランキングである。

図表7 【複合分野のライフサイクル】設置数:2018年上位10位



設置数上位の複合学科のライフサイクル

次に、編集部では、最近特に設置数が多い複合分野の変遷を視覚的に追うことができないか、1章に倣い設置数上位の組み合わせについて図表化を試みた。まず図表6に、2018年の複合学科設置数上位10位を、それぞれのライフサイクルをまとめて図表7に示した。それぞれ詳しく見ていきたい。

設置数1位 教育学×保育・児童学(52件)

ライフサイクル(図表7)で見ると現在衰退期であるが、募集定員は2008年3020人→2018年4581人と約1.5倍、志願者は2008年1万3765人→2012年1万8087人と約1.3倍になっている。グラフの通り、特に2008～2012年に成長した市場だ。市場を構成している大学を見ると、国立大学の教育学部が乳幼児領域を網羅しているケースと、女子大学の保育領域が改組等で初等教育も包含するようになったケースが多いようである。

P.9にある通り、教育学は単独で見ると成熟期、保育・児童学は撤退期にある。撤退期にある保育・児童学に親和性の高い教育学という付加価値を付与することで成長トレンドに戻そうとしたとも見ることができそう。こうした学際において重要なのは教育コンテンツやその他リソースにおける「分野同士の親和性」であろう。

設置数2位 栄養・食物学×健康科学(41件)

ライフサイクルで見ると2016→2018年にかけて撤退期に入っているが、定点で見ると募集定員は2008年2100人→2018年2980人、志願者は2008年6662人→2018年1万4895人と大きく拡大した。既知の通り、「栄養・食物学」は管理栄養士や栄養士といった資格取得を軸にしたマーケットであるが、P.8にある通り単独では衰退期にある。その一方で健康科学と複合化し、マーケットを広げているのである。高齢社会を見据え、健康維持促進と食を掛け合せたマーケットで、極めて蓋然性が高い組み合わせと言えるだろう。

設置数3位 電気工学×電子工学(40件)

2012年から再成長予兆期に入っている分野。募集定員は2008年4214人→2018年3640人と減少するも、志願者は2008年2万4485人→2018年4万2252人と大きく拡大した。電気工学は単独では成長期、電子工学は再成長予兆期であり、単独も複合も市場拡大の兆しが見える。

設置数4位 情報学×情報工学／スポーツ学×健康科学(36件)

まず情報学と情報工学の複合分野は、2008年から長らく成長期である。募集定員は2008年2681人→2018年3553人、志願者は2008年2万3007人→2018年4万719人と大きく拡大した。

次にスポーツ学と健康科学の複合

分野は概ね右肩上がりに市場を拡大し、現在も成長期である。募集定員は2008年1985人→2018年3931人と1.9倍、志願者は2008年1万1410人→2018年2万5644人と2.25倍にも拡大した。

設置数6位 機械工学×システム・制御工学(32件)

再成長予兆期に入っている分野。募集定員は2008年3414人→2018年2508人と減少する一方、志願者は2008年1万7395人→2018年1万8282人と微増している。過去の水準を見ても、志願者が乱高下するようなフェーズはなく、粛々と進んでいる分野だ。なお、単独で見ると機械工学は撤退期、システム・制御工学は再成長予兆期にある。

設置数7位 システム・制御工学×情報工学／日本文化学×語学(日本語)(23件)

まずシステム・制御工学と情報工学の複合は再成長予兆期にある。募集定員は2008年2537人→2018年1211人と約半減、志願者は2008年1万779人→2018年1万2660人と増加している。いずれも第4次産業革命に大きく関連する分野であるがゆえに、どちらの分野も他の複合パターンでよく見られるようになっており、様々な複合パターンに分散傾向であることが推察される。

次に、日本文化学と語学(日本語)の複合である。2016年から成長期に入っている分野だが、募集定員は2008年1856人→2018年1647人、志

願者は2008年1万5655人→2018年1万5687人と大きな変化はない。変動は少ないが常に同じ規模のマーケットを維持している分野と言えるだろう。

設置数9位 経済学×経営学(22件)

成長期にある複合分野。募集定員は2008年1864人→2018年3229人、志願者は2008年1万1189人→2018

年1万8738人と大きく拡大した。サイクル図の通り、2008→2012年よりも2016→2018年の成長幅が大きく、戦後最大の景気回復期の進捗に合わせて市場が形成されている様子が垣間見える。

設置数10位 情報学×メディア学(21件)

トレンドとしては撤退期に入って

いる分野。募集定員は2008年2157人→2018年1787人と減少、志願者は2008年9415人→2018年9528人と概ねイーブンとなっている。推移で見ると2008→2012年に伸長したがその後は縮小トレンドである。単独で見ると情報学は再成長予兆期、メディア学は成長期にあり、複合より単独の方が成長している分野といえる。

3章 学部・学科改編のマーケット・トレンド

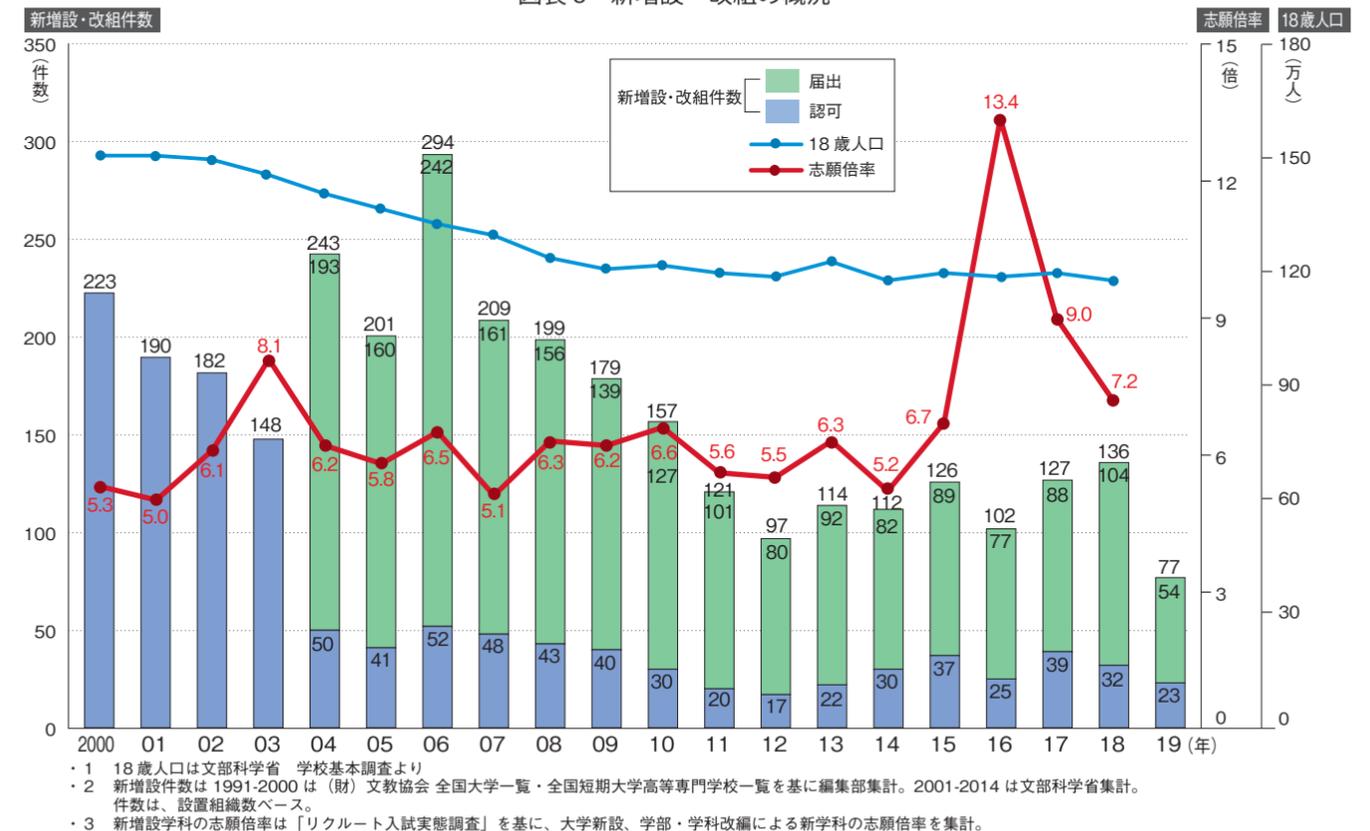
本章では、学部・学科改編、いわゆる新増設の動向を見ていきたい。

まずは認可・届出件数の動向についてだが、2000年以降の認可・届出件数と志願倍率の推移を示したのが図

表8である。周知の通り、2004年の届出制導入により認可・届出件数は増加し、全体の8割を届出が占める。届出は明らかに大学の学部・学科の新陳代謝を促進したが、その一方で、昨今の

大学設置分科会からは「準備不足や安易な申請が目立つ」といった指摘もある。2016年度開設分から審査スケジュールが従来より前倒しとなり、2018年度には専門職大学・短期大学

図表8 新増設・改組の概況



図表9 単独分野の新增設・合計設置数ランキング (2008-2018年)

順位	学科系統(小)名称	2008 設置数	2009 設置数	2010 設置数	2011 設置数	2012 設置数	2013 設置数	2014 設置数	2015 設置数	2016 設置数	2017 設置数	2018 設置数	設置数 合計	2008-2012 平均倍率	2015-2018 平均倍率
1	看護学	9	11	11	8	8	8	16	16	6	12	13	118	6.7	7.2
2	医療技術学	8	6	13	5	7	11	6	2	6	7	4	75	6.2	6.3
3	リハビリテーション学	9	6	4	12	4	7	1	9	5	6	6	69	4.7	6.0
4	心理学	6	8	5	2	5	2	6	4	3	5	9	55	6.8	7.7
5	経営学	9	7	1	6	4	4	7	3	4	4	3	52	6.9	8.9
6	保育・児童学	7	7	8	4	2	1	3	4	-	3	3	42	4.3	4.0
7	教育学	4	5	2	2	2	2	4	4	7	5	3	40	11.6	11.6
8	栄養・食物学	5	-	5	3	3	-	3	2	3	3	3	30	7.0	6.8
9	語学(外国語)	5	2	2	2	2	2	4	-	1	2	5	27	6.4	9.5
10	福祉学	8	1	3	2	3	2	1	2	2	-	-	24	3.1	3.9
11	教養学	6	1	2	1	1	1	1	3	-	3	-	19	6.2	7.3
	デザイン	3	3	2	2	-	1	1	3	1	3	-	19	5.5	6.4
14	社会学	3	1	3	1	1	2	1	4	-	1	2	19	11.5	11.9
	経済学	4	3	1	1	-	2	1	2	-	1	2	17	8.7	11.2
17	国際関係学	1	1	1	-	1	1	2	2	3	4	1	17	6.8	8.7
	建築学	2	3	-	3	-	-	1	-	2	3	3	17	7.7	15.5
17	機械工学	3	1	2	-	-	1	1	1	2	2	2	15	10.9	15.6
18	生命科学	5	1	2	-	2	-	-	-	1	3	-	14	14.3	16.0
19	美術	1	-	4	1	3	-	2	-	1	1	-	13	4.4	4.3
20	総合政策学	1	-	1	3	2	-	1	-	-	2	2	12	7.4	10.5
	観光学	3	-	2	1	-	1	-	2	-	1	2	12	5.2	7.6

※平均倍率は、公表のみ集計 ※リクルート入試実態調査より、私大のみ

図表10 複合分野の新增設・合計設置数ランキング (2008-2018年)

順位	A分野	B分野	C分野	2008 設置数	2009 設置数	2010 設置数	2011 設置数	2012 設置数	2013 設置数	2014 設置数	2015 設置数	2016 設置数	2017 設置数	2018 設置数	設置数 合計	2008-2012 平均倍率	2015-2018 平均倍率
1	教育学	保育・児童学		7	4	4	4	3	2	3	-	1	2	4	34	5.1	4.4
2	スポーツ学	健康科学		7	2	2	4	4	-	1	2	-	4	2	28	7.3	7.1
3	栄養・食物学	健康科学		5	4	3	2	-	2	2	2	1	2	-	23	3.9	5.1
4	情報学	情報工学		-	4	2	-	2	1	1	-	2	2	1	15	8.5	10.1
	機械工学	システム・制御工学		4	2	1	1	1	1	-	-	2	-	3	15	4.7	6.9
6	経営学	観光学		2	4	1	-	1	3	-	1	1	-	-	13	3.3	3.2
	電気工学	電子工学		5	-	1	-	2	1	1	1	1	-	1	13	6.3	10.1
8	数学	物理学		1	4	-	-	1	-	1	1	1	1	2	12	9.6	10.5
	経済	経営学		-	4	-	-	1	3	1	-	1	-	2	12	5.5	5.2
10	システム・制御工学	情報工学		3	1	1	-	2	1	-	-	1	1	1	11	4.4	8.7
11	デザイン	建築学		-	-	-	-	1	-	-	1	4	2	1	9	6.0	9.0
12	情報工学	電気工学	電子工学	1	-	1	-	-	3	-	1	1	1	-	8	9.3	9.1
13	生命科学	応用化学		1	2	-	2	-	-	-	-	1	1	-	7	3.7	4.5
	社会学	人間科学		2	-	-	1	-	-	1	1	-	-	2	7	3.3	4.0
	情報学	メディア学		3	2	-	1	1	-	-	-	-	-	-	7	4.4	5.6
	人間科学	教育学		3	1	-	-	-	1	1	-	-	-	1	7	3.7	3.4
	教育学	スポーツ学		2	2	-	1	-	-	1	-	-	-	1	7	4.7	5.5
	土木工学	環境工学		-	1	-	-	1	-	-	-	1	2	-	7	7.1	9.9

※平均倍率は、募集人員・志願者数が公表のみ集計 ※リクルート入試実態調査より

の新設認可も加わったが、その認可率の低さとともに、こちらも「制度創設初年度であるものの、総じて準備不足で法人として大学設置に取り組む体制が不十分」という指摘がなされており、厳格化ムードが一層強まっている。

次に志願倍率である。大きく上昇した年は大規模大学の新增設に伴うもので、下降する年も個別の理由によるものであろうが、概ね5.0~8.0倍の幅で推移しており、高校生は新しい学部学科を好意的に見ているようである。では昨今人気のある分野について見ていこう。

単独分野の新增設トレンド (2008-2018) 図表9

単独分野の新增設では、設置数トップ3が医療系で占められ、1位の看護学は設置数118と群を抜いている。毎

年一定数が設置されているが、近年は2016年を除き毎年2桁の設置数となっている。2015-2018年の平均志願倍率は7.2倍と未だ高い状態だ。2位の医療技術学は設置数75件、平均志願倍率は6.3倍。3位のリハビリテーション学は69件、6.0倍といずれも高めの水準。上位5位までは2015-2018年の志願倍率が2008-2012年当時よりも高くなっており、順調に市場が形成されていると言えるだろう。

なお、平均倍率が10.0倍を超える分野に注目すると、7位教育学(11.6倍)、11位社会学(11.9倍)、14位経済学(11.2倍)、同建築学(15.5倍)、17位機械工学(15.6倍)、18位生命科学(16.0倍)、20位総合政策学(10.5倍)が挙げられる。これらは市場規模に対し定員が大幅に不足している状態とも言え、今後設置数が伸びることが予想される。ただし、大規模大学が多く設置することで相対的に倍率が上昇するケースもある。

複合分野の新增設トレンド (2008-2018) 図表10

複合分野の新增設は、1位教育学×保育・児童学(34件)、2位スポーツ学×健康科学(28件)、3位栄養・食物学×健康科学(23件)、4位は情報学×情報工学と機械工学×システム・制御工学が15件ずつで並んだ。上位13位までの組み合わせでは、教育学、健康科学、情報学、情報工学、電気工学、電子工学…と、トレンドの分野が多く並ぶ。平均倍率が10.0倍を超える人気分野は、4位情報学×情報工学(10.1倍)、6位電気工学×電子工学(10.1

倍)、8位数学×物理学(10.5倍)が挙げられる。いずれも技術革新の期待が大きいと思われる分野であり、まだまだ志願のニーズが高い状態にあると推察される。

本原稿執筆中に、東京理科大学と第一生命の包括連携協定が発表された。社会ニーズの高いデータサイエンスと生命医科学分野での人材育成・研究を共同で行っていくという趣旨である。特定の職種について、社会ニーズからバックキャスト的に大学での人材育成を志向する場合、これまでは大学は既存の教育組織の工夫または該当領域を新增設して対応するのが常であった。しかし、2018年11月26日に中央教育審議会より出された「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン答申」においても、「大学の多様な強みを強化」し、社会ニーズに迅速に対応しつつ大学教育の質保証の観点からも「大学等の連携・統合」の必要性がうたわれている。社会に求められる全てを自前で対応するのではなく、共通目的を置いて協力していく動きが必要というわけである。新しい人材育成にあたり、学部・学科新增設で内包するのではなく、他大学や企業との連携によって行っていく流れが今後どの程度加速するのか。そうした流れが加速すれば、当然学部・学科の動きだけではトレンドをつかみづらくなっていく可能性もある。注目していきたい。

※1 STEM教育:Science・Technology・Engineering・Mathematicsの頭文字をとった、科学・技術・工学・数学の教育分野の総称
 ※2 STEAM教育:STEM教育に芸術(Art)を加えて提唱された教育